

発行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北 32 条
西 5 丁目 2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第 79 号 2013. 8. 1
北海道ポーランド文化協会会誌

北海道ポーランド
文化協会
創立25周年!

Happy 25th Anniversary!

第67回例会



第15代Kitara専属オルガニスト
カチョルさん

～オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽～



マリア・マグダレナ・カチョル
オルガンリサイタル with 松井亜樹

2013年8月16日(金)

開演14時(開場13時30分)

北海道大学クラーク会館講堂(北8西7)

※入場整理券(無料/自由席)・フライヤーを同封しています。



ポーランド文化を研究している縁で、カチョルさんが札幌に来てからとても親しくさせていただきました。Kitara のカフェで彼女の音楽話に耳を傾けるうちに、彼女がポーランドだけでなくロシアも含めスラブのオルガン曲、ピアノ曲にとっても造詣が深いことを知りました。ぜひ札幌でスラブ音楽を紹介する機会をもちたいと思い、北海道大学パイプオルガン研究会、日本アレンスキー協会と北海道ポーランド文化協会の共催の演奏会として実現することができました。

カチョルさんのオルガンを初めて聴いたときからぜひ共演していただきたいと思っていた声楽家の松井亜樹さんにも出演を快諾していただき、素晴らしいプログラムになりました。ラフマニノフやショパンの有名曲のオルガン編曲版、グラズノフ、スジンスキなどのスラブの作曲家のオルガン曲、アレンスキーとモニューシュコの歌曲など、聴きどころに溢れています。北海道大学クラーク会館のオルガンとカチョルさんの共演も見逃せません。みなさまのご来場を心よりお待ちしております。(佐光 伸一)

日本の印象



マリア・マグダレナ・カチョル

日本の地で私の音楽的冒険が始まってからもう10カ月が過ぎました。札幌に来るまでは、これほど多くの素晴らしい体験やコンサートが私を待ち受けているとは思っていませんでした。日々の生活について私が思い描いていた想像も、実際に私が出会った現実とはかけ離れたものでした。私は今ははっきりと確信してこう言うことができます、「これは私の人生で最も美しい瞬間である」と。

最初の日々

私が初めてコンサートホール Kitara のステージの敷居をまたいだ瞬間、私はこのあまりにも美しい空間にこれから何度も出演することになるとは信じられませんでした。日本に来る数週間前に眺めた写真は、このホールのスケールを十分に伝えてはいませんでした。ステージの高さからバルコニーを見上げたとき、私は聴衆の要求にこたえ

るために、私に課せられた責任がいかに大きいかを初めて実感しました。しかしまたそれはとてもモチベーションの高まる瞬間でもあり、私はこの瞬間を決して忘れないでしょう。

最初に若い聴衆と出会ったことは私にとって大きな喜びでした。9月の終わりに小学校の生徒のためのコンサートが企画され、プログラムにオルガンと管弦楽の曲が含まれていたのです。

この経験のおかげで、2012年10月6日に予定されていた私のデビューリサイタルの準備ははるかに容易になりました。デビューリサイタルのプログラムには興味深い作品がたくさん含まれていましたが、中でも最大のものにはフランツ・リストの作品でした。聴衆は私をとて暖かく迎えてくれました。演奏中、あり得ないほど強いエネルギーを感じ、それがまるで私と聴衆を結ぶ架け橋のように感じました。このような感覚を体験したことはこれまで一度もありません。日本の観客がどれほど素晴らしく、本当に音楽を愛しているかが分かりました。リストの素晴らしいコラール「アド・ノス、アド・サンタレム・ウンダム」の最後の和音が響き渡ったとき、何の障害もなくコンサートの全曲目を演奏し終えた幸せで涙が頬を流れました。一言付け加えれば、ヨーロッパでは、オルガンのコンサートは60分から65分を超えることは決してありません。日本でのリサイタルは100分以上で、身体的にもかなりの努力を必要とします。

オーケストラとともに

オーケストラとの音楽を通しての出会いも、どれもが得難い体験でした。子供のためのコンサートのほかにも、サン・サーンスの交響曲、チャイコフスキーのマンフレッド交響曲、マスカーニ、アンダーソン、エルガーなどの作品もオーケストラとともに演奏しました。指揮者の山下一史さん、尾高忠明さん、高関健さんとの仕事は、素晴らしい貴重な経験で、大きな満足感をもたらしてくれました。大木秀一さんとの共演も素晴らしいものでした。彼の指揮のもと、私たちのコンサートの10日ほど前にコンクールで全日本の頂点に立った合唱団とクリスマスコンサートで共演したのです。

日本での最初の数カ月、Kitaraの館長の依頼で、私はポーランドの音楽とポーランドのオルガンに関する講演を準備しました。フランス語の通訳の助けで、2つの小学校で生徒のために講演し、曲の一部も演奏しました。またピアニストとオルガニストのためにJ.S.バッハの「平均律クラヴィーア曲集」に関するワークショップも2013年1月に行いました。自分の音楽のルーツであるピアノに戻ることができて、とても幸せな気持ちになりました。

初めてのCD

2013年の前半を飾ったのは、私のプロとして初めてのCDの録音でした。Kitaraのホールでアルフレッド・ケルン社のオルガンを使って行いました。共同作業と努力の結果、とても良い録音になり、収録した曲では豊かな音色と多様なスタイルを示せたと思います。選曲は決して容易ではありませんでしたが、すでに発売された今では、録音された1音1音すべてが私の喜びです。ここにはバロック、ロマン派、現代音楽、ドイツ、ポーランド、フランス音楽、オルガン用のオリジナル曲、即興曲、ピアノ曲を私が編曲したものなどが含まれています。好みにうるさい音楽マニアの方でも、きっとお気に入りの曲が見つかると思います。

各地でのコンサート

4月からは仕事のテンポが速くなりました。北海道だけでなく日本全国でのコンサートの数が増えます多くなったのです。5月と7月には東京の2つの最も素晴らしいコンサートホールに出演するという素晴らしい機会があり、また大森めぐみ教会でバッハのリサイタルを行うこともできました。



東京芸術劇場とサントリーホール＝写真上＝は、世界中の高名な演奏家を招待しています。そこはとりわけオルガニストのための場所でもあります。両ホールには素晴らしいオルガンがあるからです。東京芸術劇場のオルガンは、フランスのガルニエ社製で、構造がとてもユニークです。ルネサンス、

バロックそしてより現代的な響きという 3 つのスタイルを独立して兼ね備えています。他のオルガンと違って、クラシックケースとモダンケースという 2 つのオルガンケースがあり、特殊な仕組みで軸によって回転します。

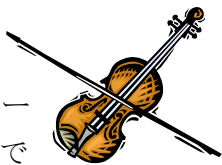
サントリーホールオルガン“Rieger”はとても興味深く、響きの素晴らしい楽器です。私が利用して非常に便利だったのは、2番目の移動可能な演奏台で、ステージ上の好きなところに置くことができ、コンサートの間、聴衆と直接コンタクトを取ることができます。“Rieger”社はオーストリアの会社で、1845 年以來オルガン製作を専門に行っています。

東京の大森めぐみ教会での、日本でヨーロッパのメーカーにより最初に製作されたオルガンによるコンサートと 7 月の Kitara のバースデーコンサートでは、J.S. バッハの作品のみを演奏する機会に恵まれ、感動的なひと時でした。バッハは 10 年前から限りなく崇拜してきた作曲家なので、彼の作品だけに捧げられたコンサートの思い出は永遠に私の心に刻まれました。

バイオリンとの共演

札幌交響楽団のコンサートミストレスでバイオリニストの大平まゆみさんとの室内楽のコンサートも、本当に素晴らしい出来事でした。素晴らしい曲なのに日本ではあまり知られていない作品を聴くために、約 1300 人のお客様が来場してくださいました。バッハ、アルビノーニ、モリコーニの作品、私の編曲によるブラームスのハンガリー舞曲集第 5 番、サラサーテの「アンダルシア・ロマンス」を演奏しました。この日のために、私は A. ヴィヴァルディの「四季」から〈夏〉を編曲しました。さらにマスネの「タイス」の瞑想曲、モンティの「チャルダッシュ」も演奏しました。この日聴衆から受けた喝采は、私の人生ではこれまで決してないほど大きなものでした。

札幌のみなさまにまったく知られていない作品を演奏できるなら、もう一度このステージに出演したいと願っています。オルガンの音色を巡る私の



冒険はようやく始まったばかりだとの思いを強くもっています。ピアニストとしての勉強、そして長年にわたる室内楽での実践による経験のおかげで、私は他のオルガニストが気づかなかったかもしれない、オルガンの知られていない一面を表現することができるようになったのです。

旭川のリードオルガン

旭川豊岡教会にゲスト出演したときにも、同じような感覚を味わいました。この教会でのコンサートでは、オルガン音楽だけでなく、リードオルガンのオリジナル曲の作曲法にも耳を澄ませてもらいました。旭川にあるこの楽器はアメリカで 1890 年に製作され、15 年後に他の 2 台の楽器と一緒に日本に運ばれましたが、現在まで保存されているのはこの 1 台のみです。リードオルガンのあまりにも美しい響きは、この「ハーモニウム」でのレパートリーに今後も取り組もうという靈感を吹き込んでくれました。

この楽器の製作と作曲家たちのこの楽器に対する関心の高まりは 19 世紀中ごろから 20 世紀中ごろまでに姿を消しました。今日では、リードオルガンのための素晴らしい作品の価値を評価する機会もありませんが、その価値は他の楽器の作品に劣るものではありません。むしろ、S. カルク=エレルト、A. ギルマン、C. フランク、H. ベルリオーズ、L. ヴィエルヌなどの作品で、多くの音楽家がこの楽器で自らの最高の技術を示しています。

日本滞在の最後の一月は、これから待ち受けている演奏会のおかげで、喜びと感情に満ち溢れています。ソロのコンサートがふたつと室内楽のコンサートがひとつあります。

北大でのコンサート

8 月 16 日の北海道大学でのコンサートではソプラノの松井亜樹さんと、ポーランド音楽とロシア音楽を演奏するという嬉しい機会を得ました。

東欧の音楽はいつも私の心の最も近くにあります。ピアノの勉強をしていたときには、F. ショパン、I. J. パデレフスキ、W. ルトスワフスキ、E. パウラシュ、J. ザレンプスキ、K. シマノフスキなどのポーランド

の作曲家や、S.ラフマニノフ、S.プロコフィエフ、P.チャイコフスキー、M.ムソルグスキー、D.ショスタコーヴィチなどロシアの作曲家の多くの作品を演奏しました。数年前からは、私が興味をもったポーランドとロシアのあまり知られていないオルガン曲を演奏しています。ミェチスワフ・スジンスキとフェリクス・ノヴォヴィエイスキの作品は、和声と構成の観点からきわめて興味深いものです。スラヴのメロディーの響きのおかげで、聴衆は初めて聴く響きに夢中になります。

ロシアのオルガン音楽は、正教会で楽器が用いられなかったため、ポーランドと同じレベルにはありませんが、グラズノフなどの巨匠が残した数少ないオルガンの小品は、聴くに値する興味深

いものです。今回のプログラムではラフマニノフのプレリュードの中から、オルガン用に編曲された素晴らしい作品を演奏します。

フェアウェルコンサート

私の最後のフェアウェルコンサートは、2013年8月24日に札幌コンサートホールで開かれます。日本のアーティスト藤原貴子さん、谷野健太郎さんを迎えて、P.コシュローのオルガンと2台のパーカッションのための作品、ベートーヴェンの交響曲第5番の最終楽章を私が編曲したものなど、サプライズに溢れたコンサートになっています。

この最後に残された2つのコンサートで北海道ポーランド文化協会、日本アレンスキー協会のみなさまとお会いできるのを心より楽しみにしています。

(佐光伸一 訳)

北大クラーク会館の パイプオルガンについて

北海道大学パイプオルガン研究会
会長 金多景 (キム・ダギョン)



カチオルさんと金多景さん。クラーク会館のパイプオルガンの前で。

北海道大学クラーク会館講堂には、北海道で2番目に設置されたパイプオルガンがあります。

パイプ本数が1556本、ストップ数が24個であり、

現在も道内では有数の規模を誇る楽器です。特に、国立総合大学でパイプオルガンを所有しているのは珍しいです。

北大にパイプオルガンが設置されたのは、約50年前のことです。北大の創基80周年のとき、学生のための福利厚生施設(現・クラーク会館)が設立されました。当時、卒業生等に募金を呼びかけた結果、北大創基80周年記念会館建設期成会からの寄贈という形でクラーク会館へのパイプオルガンの設置が実現されました。ドイツ・ボンのヨハネス・クライス社によって3年余かけて製造されたこのオルガンは、1962年、ハンブルク港から小樽港への船旅を経て、北大に到着し、1966年5月末に組

立と整音が完了しました。

このパイプオルガンを用いて、大学主催で内外の著名なオルガニストを招いた演奏会や、学生向けの特別講義(全学教育科目「パイプオルガンとその音楽」)などが行われており、普段接する機会の少ないパイプオルガンという楽器により親しみを感じていただくきっかけとなっています。

1990年代初め、一時中断されていた大学主催の定期演奏会が再開されるなど、北大のオルガンをより活用しようという声が起こり、それをきっかけに北海道大学パイプオルガン研究会が1994年5月に設立されました。現在、研究会ではクラシック音楽はもちろん、その他のジャンルの曲も演奏することによって、パイプオルガンという楽器のさまざまな魅力を引き出そうとしています。また、公認学生団体として定期演奏会を春と秋、年に2回主催しています。

今回、Kitara 専属オルガニストのカチオルさんのリサイタルがクラーク会館で行われることとなり、多くの方々に北大のオルガンの音色を披露できますことを、大変嬉しく思っています。パイプオルガンがより親しみのある楽器になることを期待しています。

第65回
例会報告

「ポーランド映画セレクションⅢ」を終えて

実行委員長 佐光伸一

今年で3回目となるポーランド映画セレクションを6月8日(土)、9日(日)の日程で、狸小路の札幌プラザ2・5で開催しました。これまでの2回は、北大学術交流会館が会場でしたが、さらに幅広い客層に会場してほしいとの思いから、大学を飛び出して街の中心部で開催することにしました。

昨年から今年にかけて、ポーランド広報文化センター主催により「ポーランド映画祭 2012」というイベントが、東京、大阪、京都で開かれました。『灰とダイヤモンド』、『水の中のナイフ』など戦後のポーランド映画の傑作をまとめて上映する魅力的な催しです。札幌でもぜひ上映したいと思い、ポーランド映画の巨匠作品の中で、あまり知られていない5本を選びました。『サラゴサの写本』を除き、残りの4本は多かれ少なかれ戦争を背景にした作品です。初夏の週末(よさこいソーラン祭りと同じ日)にテーマが少し暗すぎるかと悩みましたが、ポーランド映画のありのままの姿を、また歴史と対峙するポーランド映画の姿勢に共感を覚えるファンもいるのではとの思いから、あえてこれらの作品を札幌の観客にぶつけることにしました。



舞台挨拶をする
ユテ監督(右)、
シエラケヴィガ
ス監督(中央)と
通訳の久山
宏一氏(左)

また今回の目玉は、ポーランドドキュメンタリー映画界の巨匠、マチェイ・ドルィガス監督と奥さまのヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督が作品を持って映画祭に参加して下さったことです。監督夫妻の来日を企画したポーランド映画研究の第一人者、久山宏一先生もコーディネーターとして同行して下さいました。両監督の上映会と講演会には、およそ100名のお客様が集まりました。質の高さとテーマのあまりの重さに、会場全体が衝撃を受けている

とが、ひしひしと伝わってきました。ドキュメンタリー映画の上映が札幌での映画祭の恒例になっていきますが、3回目にしてドキュメンタリーセクションの質の高さが頂点に達した印象で、はたして今後もこのレベルの企画を続けていけるのかと、責任の重さに押しつぶされそうになる思いでした。

また、ご夫妻から北海道の炭坑跡を視察したいとの依頼があり当協会の霜田副会長のご紹介で、「みかさ・炭鉱の記憶再生塾」の伊佐治知子さんが案内役を引き受けてくれました。労働力として利用された人たちの運命、炭鉱閉鎖後の労働者の消息などについて、両監督は熱心に耳を傾け多くの質問を投げかけていました。今後の創作活動に、この日の記憶が何らかの形で影響を与えるならば、当協会にとって、それに優る喜びはありません。

今回の映画祭は、最終的に延べ400名来場、前々回が600名、前回は500名という観客数を考慮すると、正直、少し寂しい結果となりました。ひとえに実行委員長の私の力不足が原因です。今後、冷静に結果分析をし、次回につなげていきたいと思っています。コメディや恋愛映画などバラエティに富んだラインナップを揃え、ポーランド映画になじみの薄い映画ファンにも来ていただけるようになるか、あるいは逆にドキュメンタリー映画と講演会のみを独立させ、限られた客層を対象に野心的なイベントにするか、今後の方向性について、会員のみなさまや役員の方々としっかりと議論しながら、考えていくつもりです。そのひとつの手段として、映画祭のプログラムでも募集しましたが、「ポーランド映画ファンクラブ」を結成しました。定期的集まり、ポーランド映画の勉強会を開き、今後の構想を練っていく予定です。参加希望者は、佐光(e-mail: ssamitsu@hotmail.com、携帯:090-6447-1700)までご連絡ください。

最後になりましたが、ご来場いただいた皆様、企画に賛同しご援助くださったポーランド広報文化センター、運営に尽力いただいたスタッフのみなさまに深く感謝の意を申し上げます。



ドルィガス監督との出会い

久山 宏一

社会主義ポーランド 4 部作

『私の叫びを聞け』(1991)、『自由の声』(2002)、『ポーランド人民共和国の一日』(2005)、『他人の手紙』(2010)は、アーカイヴ映像を基に社会主義時代のポーランドを描き出した記録映画監督マチェイ・J・ドルィガス(1956～)の4部作。いずれもモノクロ1時間弱の作品だ。

「社会主義ポーランド」連作は、それぞれ異なった方法論で撮られ、「連続」しているというよりは、「断続」していると評するのがふさわしい。本年5～6月に日本で上映された第1作と第4作を例にとろう。『私の叫びを聞け』では、他人が撮影した素材は少ない(変容しながら繰り返し登場するので、尺にすれば、全体の3分の1ほどを占めるかもしれない)。その周辺を新たに撮られた証言映像・再現映像が取り囲んでいる。『他人の手紙』は大半がアーカイヴ映像で、再現映像(検閲官の作業を描いた部分)は10%以下だろう。

米国国防総省の保管フィルムとニュース映像を編集して『東京裁判』(1983)を作り上げた小林正樹は、「膨大な素材を編集しているうちに、自分が演出して撮影したような気がしてきた」と述べたことがあったが、ドルィガスは、アーカイヴ映像に対して、より批評的な距離を保っている。第1作では、細部の拡大、スローモーションなどによって、「他人の映像」を大胆に改変し、第4作では、朗読される手紙への直接的・間接的な挿画として奉仕させるところまで、主体性を奪ってしまった。

『世界の夜明けから夕暮れまで』

ポーランドがEU議長国を務めた2011年下半期、ウッチ映画大学などで教鞭を執るポーランド記録映画監督たちが、モスクワ、ミンスク、キエフ、北京、東京の映画大学学生を指導して、「都市の一日」を描く連作が作られた(2012年5月に、北大学術交流会館で開かれた「ポーランド映画セレクションII」では、そのうち、「ミンスク」「キエフ」「東京」篇が上映され

た)。私はひょんなことから、東京篇の制作コーディネーター兼通訳を務めるめぐり合わせとなった。ワークショップの発案者は、ウッチ映画大学教授ミロスワフ・デンビンスキとマチェイ・J・ドルィガス。

日本映画学校・日本映画大学・日本大学の学生たちを指導したのは、初期チェシロフスキ作品のカメラマンだったヤツェク・ペトルイツキ、記録映画監督パヴェウ・ウォジンスキ、ワイド監督の『カティンの森』(2007)の編集者ラファウ・リストパトの3人だった。

『私の叫びを聞け』の作者の面識を得たのは2011年8月、東京でのワークショップ終了後に滞在したワルシャワでのことである。



『私の叫びを聞け』(1991)

こちらの話に熱心に耳を傾ける穏やかな紳士で、気難しい哲学者に違いない、という作品からの予想は快く裏切られた。

同年12月には日本映画大学で、『世界の夜明けから夕暮れまで』全5編+教官の作品4本の上映会が開かれた。マチェイ・ドルィガスとヴィタ・ジェラ



『統合失調症』(2001)

ケ ヴィチュテ(1959～)夫妻も長男アダムとともに日本にやってきた。マチェイ監督の『私の叫びを聞け』とヴィタ監督の『壁の向こう側』も

上映された。

紙幅の関係で、本稿では、リトアニア出身のヴィタ夫人の創作歴について詳述できないが、夫妻の創作はけっして同質ではない。マチェイ監督は、精密なシナリオを準備したうえで撮影・編集に挑むタイプ(最新作では手法を変化させている——後述)。



ロビーで観客の質問に答えるヴィタ監督（左）通訳の佐光実行委員長（中央手前）



ロビーで観客に対応するドリィガス監督（右）通訳の久山先生（中央）

完成度の高いシーケンスを綿密に組み立てた嵌め絵のようなその作品は、有無を言わせぬ説得力を持つ。ヴィタ監督は、より息の長いナレーションを好むようだ。作品の最後には、カメラによって偶然捉えられた「落ち（下げ）」のような場面が据えられていることが多い。疑問符を突き付けられた観客は、己れの脳裏で映画を完結させる。こうした特徴は、夫妻が指導した『世界の夜明けから夕暮れまで』にも明らかだった。マチェイ監督のロシア篇がコラージュ的でやや冷たいのに対し、ヴィタ監督のウクライナ・中国篇は物語的でとても温かい。

……さて、『私の叫びを聞け』が上映された直後のディスカッションで、佐藤忠男学長は「衝撃に言葉も出ない」と語り、天顔大介監督は「人間は死ぬまで人間だということを再確認した」と呟いた。私は、日本のプロの映画人に強い印象を与えたこの作品を、もっと幅広い観客層に観ていただきたいと夢見るようになった。

2012年3月には、東京・岩波ホールで『世界の夜明けから夕暮れまで』が一般公開され、その後、ワルシャワを訪れた私は、ドリィガス監督と再会した。スタジオに案内され、リストパットが編集作業中だった最新作『アブ・ハラズ』（2013）の冒頭シーケンス

を見せてもらった。『他人の手紙』のDVDを受け取ったのもそのときである。

EU Film Days 2013

EU Film Days 2013 で上映するポーランド作品選定を任されたとき、まず思い浮かんだのが、ドリィガスの「社会主義ポーランド」4 部作の最初と最後の作品を合わせて、102 分のプログラムを組むことだった。夫人の招待も決まった。日本映画大学で、シンポジウム「ポーランド記録映画の世界——ドリィガス夫妻を囲んで」が催されることになり、EU Film Days 2013 との差別化を図るためもあって、プログラムは、マチェイ監督の『私の叫びを聞け』とヴィタ監督の『統合失調症』（2001）に固まった。北海道ポーランド文化協会のご厚意により、札幌「ポーランド映画セレクション III」でも両作品が紹介されることになった。

ウッチ映画大学教授を務めるドリィガス監督は、講演者としても類稀な才能を持つ。東京での計 3 回の上映後には、毎回1時間半に及ぶ質疑応答が交わされた。札幌では、劇場ロビーや懇親会が開かれた居酒屋、さらには移動の車の中でも、議論が続いた。通訳としてこれほど働き甲斐のある日々は稀である。



初日終了後の懇親会風景。ここでも監督たちへの質問が飛び交った。



チセの室内で（左から）藤野、久山、監督夫妻、佐光、氏間、尾形 <敬称略>



ポロチセ（大きい家）の前で
アイヌ衣装をつけた両監督



ポロトコタンの玄関口
コタンコロクル像

ご滞在3日目は、白老の「ポロトコタン」を視察。同日、新千歳空港から台湾へ向かわれた。

ここでは一つだけ、新千歳空港に向かう車中で、監督が語った『私の叫びを聞け』製作秘話をお伝えしよう——映画中には、ニュース映画カメラマンが写した、燃えるルイシャルト・シヴィエツを映した7秒間の映像がさまざまに変容して用いられている（初めは周辺の人物たちの反応に焦点が当てられ、ラストで本人が映る）。ところが、映画完成後、監督は、公安局員が撮影した別のフィルムを発見したというのだ。そこには、火を消された後も叫びつづけるシヴィエツが救急車に収容されるまでが記録されていた。しかし、監督は、編集前に「消火」の記録を見る機会を持たなかったことを、特に残念とは感じなかったという。生前のシヴィエツが録音した音声による「遺書」の背景として、燃身の瞬間ほどふさわしいイメージはなかったからである。

この話を聞いて、私の脳裏に、さまざまな疑問が浮かんだ。シヴィエツは、焼身者が即死しないことを計算に入れていたのか？ 救急車の中でも、ミラのように包帯巻きにされていた病院の中でも、力が続く限り叫びつづけたのか？ 何を？ 面会に現れた妻に何を話したのか？ あるいは瀕死の彼は、もはや言葉を絞り出すこともできなかったのか？……と同時に、こうした問いがおよそ無意味であることも理解した。なぜなら、焼身という行為そのものがシヴィエツの叫びだったからである。ドルィガスの映画によって、それは時空を超えて人々に届く——東京と札幌の観客にも。

今後への期待

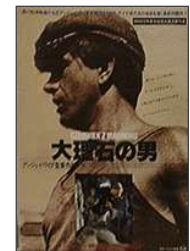
私は、ドルィガス夫妻と同世代に属する。夫妻

は、1980年前後のモスクワ映画大学在学中に知り合って結婚している。私もそのころ、ロシア語とロシア文学に没頭していた。ドルィガスは、ワイダの『大理石の男』(1976)を観たい一心で、ワルシャワに里帰りしたという。私も、1980年に岩波ホールでこの映画に出会っていなければ、ポーランド語の勉強など始めていなかったかもしれない。

しかし、体制転換後四半世紀近くにドルィガスが成し遂げた業績を鑑みると、同時代人への共感はずっと変わる。坂を登るでも降るでもない、一貫して稜線を歩み続けるような仕事ぶりだ。ソ連の宇宙飛行士にインタビューを行った『無重力状態』(1994)を挟んで、社会主義ポーランド連作で計5つの山頂を制覇した後、『アブ・ハラズ』(2013)で、ポーランドの記録映画が伝統的に得意としてきた「カメラによる観察」手法を試みる。舞台はスーダン、ダムに沈んだ小村の住民の群像劇だ。

今夏、夫妻は、グルジア、モルドヴァ、アルメニアの映画大学学生のためのワークショップを開く。年末には、『世界の夜明けから夕暮れまで』『トビリシ』『キシニョフ』『エレヴァン』篇が観られるはずだ。

その後、「最後の映画」として、「鉄道で世界を旅する」映画を作る。これまでのすべての作品がそうだったように、製作には少なくとも4~5年はかかるだろう。監督引退後は、文筆に専念したい……ドルィガスは、滞日中にそう語っていた。



『大理石の男』
カンヌ国際映画祭
批評家連盟賞

(くやま・こういち)

変わりゆくポーランドの タデウシュ・カントル

津田 晃岐

私はこの5年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいるが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。現在、ポズナン市のアダム・ミツキェヴィチ大学で教えながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められ、喜んで筆を執った。

1. 札幌

この夏、久しぶりに札幌を訪れた。何年ぶりになるのか、すぐには思い出せない。10年、いや、もっとになる。それほど遠い昔の話だ。が、不思議なことに、この年月の間に町が変わってしまったようには思えなかった。

変わったのは、むしろ私の方だった。まるで北海道大学での学生時代を再体験していくような、何とも不思議な感覚に襲われながら、同時にあの頃とはすっかり変わった自分をも実感する旅となった。

当時の様々なエピソードが思い出されていくなか、タデウシュ・カントルについての記憶も私の中でポツリポツリと口を開き始めた。タデウシュ・カントルは、ポーランドのクラクフ市を中心に活動した画家、造形作家、そして演出家だ。自作の舞台の上に、俳優としてではなく、カントル本人として常に登場していたことから、前衛的あるいは実験的な演劇の演出家と見なされている。

そのカントルと私は札幌で出会った。とはいえ、それは本を通しての出会いであり、それ以外の可能性は初めからなかった出会いだった。というのも、私がカントルを知ったのは、彼の死を追悼する雑誌の特集号によってだったからだ。

今でもはっきりと覚えている——タデウシュ・カントルという名のポーランド人の演劇家を初めて知った日、そして彼の演劇論と実践から受けた衝撃と親近感、さらにはより彼を理解したいがためだけに夢中になってポーランド語を学んだ日々。

実は、カントルについては、以前に『POLE』



結婚5周年記念の旅行は北海道めぐり。
小樽運河の前で。筆者（右）とモミカさん

第73号で彼の講義の一部を引用したことがある。「変わりゆくポーランドの消費文化」をテーマとした記事の中で、「全能の消費」というカントルの反現代文明的な概念を紹介した。

演劇の分野で前衛的な活動を続けたカントルだが、彼の創作の根本には常に「個人」への眼差しがあった。大量生産・大量消費を宿命とする現代文明の中で、その恩恵を享受しながらも、画一化され、個性を失いつつある哀れな「個人」に、もちろんカントルは目を向けた。だが、それだけでなく、暴力によって生命を奪われた個人、物のように扱われる個人、虐げられる個人、不当に低く見なされる個人、記憶の彼方に忘れ去られた個人、無視される個人に対しても、カントルは眼差し

を注ぎ続けた。彼の演劇論の特徴として知られる「死の演劇」や「最下等のリアリティ」といった概念も、最終的には、彼の「個人」への眼差しと結びついた観がある。

自分の芸術で世界を救いたいとは思わない。
 “普遍”なんか信じない。
 我々の世紀のそれなりの経験の後では、それが今日どんな形で終わっているか、この悪名高い“普遍”が、何の、誰の役に立っているか、知っている。
 今日では地球の大きさにまで広がってしまった分だけ、ますます危険になった“普遍”が。私は〈自分を救いたい〉のだ。
 我が身可愛さからではなく、どういうわけか〈個人的な価値〉しか信じられなくて！
 〈私は自分の狭い想像力の部屋に閉じこもる〉



こうしてカントル=写真上=は、終生演劇にこだわり、舞台に立ちながら、自らを「個人」のサンプルとして晒し続けた。カントルにとって、演劇とは、「個人」の想像力が仮初の姿をまとって現れる時空間であり、そうした「個人」の「想像力の部屋」こそが舞台だったからだ。

カントルと付き合いはじめて、もう20年以上になる。この間、私はいくつもの研究や論文を経て、一定の距離をカントルに対して持つようになった。心酔や信奉ではなく、冷静な理解と静かな共感とをもってカントルを見つめるようになった。それは、カントルが変わったのではなく、私の方が少しずつ変わってきたからだ。

もちろん、カントルと私の関わり自体は、私が変わったからといって終わるわけではないし、実際、研究や論文を通して今も続いている。

そして、カントルを切っ掛けに始まった、私とポーランドの関わりも、不思議な縁ながら、現在も続いている。

2. 寺山修司

カントルと日本をめぐる面白いエピソードとしては、カントルと寺山修司の友情を挙げることができる。この二人の奇才の交流は、何も演劇のレベルだけに留まらなかった。

つい最近、国際寺山修司学会刊行の『寺山修司研究』第6号のために、寺山とカントルの交友について執筆する機会を得た。その一部だが、引用させてもらう。

寺山修司(1935-1983)とタデウシュ・カントル(1915-1990)の両方の名を知る者は、同時に、この二人が生前深い親交を結んでいたことも知っている。二人の出会いについては、本人たちだけでなく、幾人かの証人もエピソードを紹介してくれている。

カントルは、人を寄せ付けない威厳をもち、つねに何かに怒っているような気難しい人だった。ところが、二十歳も年下の寺山とは気が合って、まるで仲のいい父子のように親しくしていた。パリで行われた演出家のシンポジウムで意気投合して以来、各国の演劇祭で出会うたびに親交を深めていたのである。^[1]

二人が初めて出会ったのは、1974年に「パリで行われた演出家のシンポジウム」のようである。それは、ジャン＝ルイ・バローの劇場レカミエ座で開かれたもので、世界各国から演出家、劇作家、演劇評論家らが集まった。このシンポジウムについては、寺山も『迷路と死海』(1976)の中で書いており、当然カントルの名前も登場する。また、寺山だけでなくカントルも、後年(1990)公演のために来日した際、当のシンポジウムでの寺山の印象をインタビューの中で語っている。

寺山修司には血縁性を感じたね。これは私がほかの芸術家にはほとんど感じないものだ。彼も私と同様、舞台で機械を好んで使ったし。彼はとても知的でユーモアのセンスがあった。パリのジャン＝ルイ・バローの劇場で開かれたシンポジウムに出席した時、彼は私の隣に座っていた。幸福や人類の未来につ

いてハイレベルな議論があり、私はいい加減うんざりして、異議を唱えたかった。その時寺山が手を上げて、短い話をした。「ふたりの日本人が川岸を散歩していた。ひとりが川に落ちて、溺れ死んだ。その教訓は、散歩するために川岸に行ってはいけない。」大まじめで退屈な雰囲気の中で、寺山はあえてそんな話をしたんだ(笑)。バローは「話はそれだけですか？」と尋ね、寺山は「これだけです」と言った(笑)。それを聞いて私は彼に深い共感を覚えた。短いありふれた話だが、ここには人間の運命をめぐる哲学がある。^[2]

その後も二人は、世界各地で開催された演劇祭やシンポジウムでたびたび顔を合わせ、親交を深めていった。そして、二人の友情は、寺山がこの世を去るまで続いた。死の前年、1982年の世界演劇祭「利賀フェスティバル」のために来日したカントルに会おうと、寺山は病を押して参加し、演劇祭後のカントルの東京公演のためにも骨を折った。公演当日には、劇場のロビーにさえ姿を見せ、「落ち着かない表情で客の入りを気にしていた。彼はわが国の演劇人のなかでもっとも最初にカントルを認め、彼に同志的な共感を抱いていた。」^[3]



そういえば、私が寺山修司=写真上=を知ったのも札幌だった。ちょうど北海道大学にいた時分、死後 10 周年を迎えていた寺山の作品が軒並み復刊され、ちょっとしたブームになっていた。既に演劇に関心を持ち、カントルと出会っていた私は、これを機に寺山についても興味を持ち、研究するようになったのだった。

3. 「インスピレーション」

寺山修司と同じく、カントルもまた、自国よりも先ず外国で高く評価された演劇家だ。そして、今年(2013年)死後 30 周年を迎える寺山が、この機に顧みられ、ますます評価を高めているように、死後 20 年を経たカントルも、ようやく自国ポーランドで正当に評価されつつあるようだ。半世紀に及ぶカントルの創作全期を網羅した 3 巻本の論

文集(2004 年出版)を切っ掛けに、カントルの演劇論あるいは芸術論を、現代演劇や現代美術の流れの中でもう一度捉え直そうという動きが起こっている。カントルは、今やただの「異端児」ではなく、現代芸術史の最も重要な人物の一人となりつつある。演劇だけでなく造形美術や絵画の分野でも活躍したカントルの場合、演劇と俳優術に特化していたグロトフスキとは違い、より広い文脈での再評価が行なわれているようだ。現に、アダム・ミツケヴィチ大学のポーランド学科の「ポーランド文学史」の授業でも、現代ポーランド文学に影響を与えた思想の一つとしてカントルの演劇論あるいは芸術論が紹介され、一時間の講義をまるまるカントルに捧げただけでなく、他の機会にもカントルの言葉をたびたび参照していた。

もともと国外では早くから評価されていたカントルだが、近年では、ポーランド国内でも、カントルに捧げた、あるいはカントルに触発された様々な学会やイベントが各地で開かれている。例えば、2010 年には、ポズナン市でカントルの美術作品の展覧会が、またヴロツワフ市で芝居『ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ』の上映会と学会が、そしてカントルの本拠地であったクラクフ市では死後 20 周年を記念した学会「今日こそタデウシュ・カントル！」が開催された。また、2011 年には、ジェシュフ市でカントル作品の展覧会や上映会などから成る複合的イベントが行なわれた。そして、2013 年から 2014 年にかけても、展覧会やパフォーマンス上演や出版から成る複合イベントが、クラクフ市を中心にして企画されており、その名も「誰がインスピレーションを？タデウシュ・カントル！」というものである。

注釈:

^[1] 九條今日子『回想・寺山修司 百年たったら帰っておいで』デーリー東北新聞社、2005 年、203 頁。

^[2] 扇田昭彦「人形、オブジェ、梱包、絵画…。美術家としてのカントル」、『Brutus』1990 年 6 月 1 日号(第 11 巻第 10 号)、94 頁。

^[3] 四方田犬彦『オデュッセウスの帰還』自由国民社、1996 年、36 頁。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)

第66回
例会

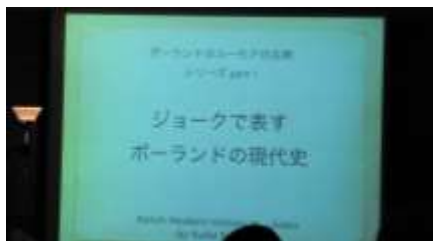


「午後のポエジア」報告

尾形 芳秀



◆ 斎田 道子 「越境する霧」より



◆ ラファウ・ジェブカ
「ポーランドのユーモアの古典」



◆ マズル・ミハウ
「ポーランドのオノマトペの詩」



◆ 氏間多伊子 「外郎売」口上から



◆ 大久保 律子 ポーランド民話
「くった、のんだ、わらった」



♪ ヨアンナ・クンツェヴィッチ
「新しい日が来るで」ほか



◆ シャレック・レナタ 「エレジー」ほか

今回の「午後のポエジア」は第三回目の開催となる。霜田副会長の発案で日本とポーランド文化の交流という見地で始められたという。ポーランド文化に大変造詣の深い氏ならではの発案であったと思う。まだ一般市民にはあまり周知されていないものの当日は50人近い来場者があり盛会であった。

東京では前任の駐日大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ女史の「ショパンと能」という試みもあった。近年ポーランド文化を知る機会が札幌でも身近になったことは大変喜ばしいことである。

さて、ポエジアというのはポーランド語で「詩」という意味であろうか。舞台には霜田氏による気迫のこもった力強い書がアートのように掲げられている。文字通り日ポの文化の融合がこれ一枚に表現されているように見える。演ずる人々に気を挿入させるかのようにふさわしいものだ。毎回感じ入っている。

毎回特に感じるの、出演者はポーランド文化によく精通されているということである。ただ単にポーランド大好きというレベルではないように思う。詩の朗読にもそれぞれの主張が感じられる。しかし、ポーランドの歴史とか時代背景の知識がなければなかなか理解しがたいものもあった。ドイツのホロコーストやソ連の統治下で抑圧された歳月を過ごしたポーランド国民は、詩、風刺小話、反戦歌という表現手段で抵抗したことはよく知られている。

ポーランド側は日本にはあまり知られていないものをさりげなく伝えたいという彼らの民族の誇りのようなものが感じられた。日本側もポーランドのことをよく理解したものが感じられた。特に内容や演技には甲乙つけがたいものだった。演者にはそれぞれの出し物に自信があったのであろう。

日本文化をポーランド人に伝えた「外郎売」は秀逸だった。そしてポーランド側からは歌と大正琴を即席状態で演じ何時もながら聞かせてくれる。自作詩と武藤類子の福島からのメッセージの紹介やブロニスワフ・ピウスツキの顕彰碑と知里幸恵の詩もタイムリーだった。日ポの共演で「友達」の内容はわからなかった

◆朗読&音楽



出演者たちのカーテンコール



最後にご来場者に挨拶する安藤会長

が師弟共演が微笑ましかった。真打は何とんでも「銃と十字架」であった。映像と朗読を組み合わせた試みは、演者のポーランド国民に寄せる尊敬と深い悲しみが強く感じられた。最後に、日ポの演者の余韻を振り返るように、篠笛奏者によって静かに幽玄な響きが場内に響きわたった。日ポの相互融合が深まったと思える瞬間だった。

今後も「午後のポエジア」が続くことを願っている。そして、もっと多くの市民が参加できるような工夫も必要だと思われる。

最後に何時もながら、ポーランドの人々によるお手製のケーキを参加者に振舞っていただきお礼を申し上げたい。中には、初めてポーランドのケーキを味わった、と嬉しそうに感想を述べられていた参加者もいたことを申し添えたい。

<文・写真>運営委員 (おがた・よしひで)



■ 書籍、人形、タペストリー、緞帳なども展示



■ いつも人気のポーランド製ケーキ。その出来栄えに写真を撮る観客も。



◆ 福原 光篠(篠笛演奏)
「竹の唄」、「童神」、「竹田の子守唄」



◆ 霜田千代磨 「銃と十字架」



◆ オレヤヅジュ・シルヴィア ◆岩田 真由美
「トマトソースの中の魚缶詰」、「友達」



◆ 長屋 のり子 「自作詩」から



◆ ウカシュ・ザブウォニスキ「ポーランドのジャズ」ほか



◆ 小林 暁子
「銀の滴降る降るまわりに」から

「脱出記」の記憶 —シベリアの強制—

尾形 芳秀

2000年の頃だろうか、定年となって漸くかつて住んだ樺太のことを思い出すようになっていた。所用でロンドンのセント・ジェームズ・パーク・ホテルに滞在していたとき、ふと立ち寄った書店で「The Long Walk」という本が偶然目についた。ポーランド人のスラヴォミール・ラウイツ(Sławomir Rawicz)という人が自分の体験記を書いたものだ。その本を手にしたとき一枚の地図にくぎ付けとなった。それにはシベリアからインド(ダージリンあたり)までの逃走ルートが書かれていた。シベリアから生きて脱出できるものだろうか、と半信半疑だった。内容もよく理解できずに滞在記念にと購入してきた。その後、目次や英国の書評程度は読んでいたが、樺太で実際にあったことが走馬灯のように思い浮かべられた。

1940年前後だと思うが、樺太の首都豊原で、ヨーロッパから来たという名も知らぬ女性が数人滞在していた。喫茶店で働きながら誰かを待っていたようである。しかし、この女性たちのことは当時の人々は誰も詳しいことは知らない。ソ連と国境を接する島である。きっと北サハリンから脱走か亡命してくる人を待っているのではないか、と人々は噂をしていた。数年が経過して彼女たちのことは私たちの視線から消え話題にもならなくなった。

私は2000年頃、戦前・戦後を知る豊原の人々の集まりで、このことを話題にしたことがある。しかし、誰も詳しいことは知らない様子だった。ところが、その中の一人と思われる女性について消息の手が

りがみつかった。その女性たちはシベリアに抑留されていた最愛の人が脱走したとの噂を聞きつけ、もしかしたら地理的に樺太へ脱走したのではないかと考えて確証もないのにじっと待っていたというのである。

彼女たちの一人は、その後どのような経緯からか不明であるが、樺太通信局の英語教師をやっていたという。そして、通信局職員と結婚したという。きっと待っていたのは恋人だったのかもしれない。しかし、待ち人は樺太に現れることはなかった。他のヨーロッパの女性たちも同じような理由から極東の地で最愛の人を待っていたのであろう。

私はこの樺太の出来事と符合するところがあり、関心をもってこの本のことを思い出したのである。その後日本でも翻訳が出版された。それは「脱出記-シベリアからインドまで歩いた男たち」と改題されていた。シベリア脱走は、樺太ではなく何とインドへの前人未踏の脱出劇だったのである。私は樺太で待ちわびていた女性たちの思いと重ね合わせて、脱出劇は真実の物語だったことを知った。

現在では映画も制作されている。何故かタイトルも「The Way Back」となっていた。アメリカから取り寄せて何度も見たが、2012年末には日本でも発売された。ぜひ、翻訳された本をご覧いただきたいと思う。吹雪のシベリアを脱出し成功した数少ないドキュメンタリーである。



(おがた・よしひで)

「幽玄の情景」 — 賀茂 —

選と文＝ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)

生の欲求は矢の如し。私の心の中で加速し、天の雷鳴の如く轟いて、消えていく。稲妻が落ちた場所に水が湧き、広い川となって流れ出す。これが賀茂川。時に澄み、時に濁る。ああ、私の心も同じ。時に澄みわたり、時に混乱する。ひとつの場所、ひとつの森にふたつの神の姿が見えるのはなぜ？あり得ないほど驚異的なこと。稲妻は何故に泉に射られたのか。神の意図は知る由もない。

瀬見の小河の清ければ。
瀬見の小河の清ければ。
月も流を尋ねてぞ。
澄むも濁るも同じ江の。
浅からぬ心もて。何疑いのあるべき。



上記は前駐日ポーランド共和国大使ロドヴィッチ女史による連載(2013年1月～12月号掲載予定)
「家庭画報」編集部への許可を得て転載



ポーランド空手道 事始め

浄土寺住職 霜田千代磨

ポーランド伝統空手道連盟、理事長ボーデック・クェチンスキー氏より冊子が送られてきた。開いてみると、僕がポーランドに留学し、空手道をポーランドに伝えてから、丁度40年という事で40周年記念の薄いアルバムであった。

東ヨーロッパの国にポーランド人民共和国がある。札幌冬季オリンピックの年90メートル級ジャンプでポーランドのフォルトナ選手が111メートルを飛んで優勝した。奇しき因縁の1972年に僕はポーランドへ留学した。グロトフスキーの実験劇場で演劇の勉強をするためであった。

当初のポーランドは「社会主義人民共和国」であった。党の第一書記長はゴムウカからゲエレックに変わっていた。ウッジ市にある、ウッジ大学付属の外国人のためのポーランド語学校で一年間、ポーランド語の勉強をすることが義務付けられていた。

学校は全寮制であった。ベトナム、モンゴル、北朝鮮、アメリカ、イギリス、フィンランド、アラブの国々、キューバ、日本の同期生三人と多種多様な人種が入り混じっていた。

朝8時から夕方5時までポーランド語はもちろん、「歴史」、「地理」、「文学」等全てポーランド人の先生がポーランド語でまくしたてた。ポーランドの英雄、キューリー夫人、コペルニクス、ショパン等々の伝記まで暗記させられた。おかげで今でもポーランド語の会話にはさほど不自由はしない。有り難い事である。

しかし、日本で大学を終えた若い僕にはストレスが溜まったのも事実である。

或る日、ウッジ市の中心街ピョートルコフスカ大通りへ出る電車の中で「今、何時ですか？」と日本語でポーランド人の一人の学生が話しかけてきた。



ポーランド伝統空手道連盟
ホームページ



伝統武道に対する関心
は非常に高い。

アンジェー・ユシケヴィッチであった。

それが縁で、毎夜8時から、ときには午前零時過ぎまで小学校の体育館で空手道の練習指導が始まった。なにせ、ストレスでエネルギーと性欲だけは余りかえていた。その後3年位の間は、最も激しい練習をしたように思う。

3、4日の休みがあると、シチェチン市工科大学、ヴェロワフ市、グダンスク市工科大学、ワルシャワ工科大学とポーランド国内を飛行機で飛び回って、空手道の普及指導に務めた。

その一番最初に教えた一人がボーデック・クウェチンスキーであった。当時中学生か高校生だったように思う。その後、彼は国立ウッジ陸軍医科大学を卒業した。現在は国際伝統空手道連盟全ヨーロッパ理事長。国際伝統空手道連盟の本部はアメリカ合衆国ロサンゼルス市に在る。主席師範は拓殖大学OBの西山英峻先生(故人)である。

自分は現在も2年に一度ポーランドで行われる、国際伝統空手道連盟の世界選手権大会は、必ずポーランド空手連盟の「初代師範」として招待を受ける。ポーランドの空手人口は6万人いるといわれている。人生は本当に不思議なものだと思う。自分のストレス発散で指導した空手道が縁となって、大いなる子孫を次々と生んで行く現実を見た時、本当に大学で空手の練習をやってきてよかったと思う。

アルバムの見開きに「Our Story」と書かれた写真があった。そこに、40年前の自分がボーデックと演武していた。まさに真夏の「お化け」に会った気がした。
(しもだ・ちよまる) 副会長

「プレス空知」(2013年7月31日掲載)
許可を得て転載



今後の活動予定

- ◆<第67回例会> オルガンとソプラノでつづるスラヴ音楽
マリア・マグダレナ・カチョル オルガンリサイタル
with 松井亜樹

日時：8月16日 午後2時（開場 30分前）
場所：北大クラーク会館講堂

- ◆<第68回例会> ヴィトルト・ルトスワフスキ
生誕100周年記念レクチャーコンサート

日時：10月15日（水）<企画中>
場所：札幌大谷大学百周年記念館同窓会ホール
お話：ズビグニェフ・スコヴロン
（ワルシャワ大学史学部音楽学科教授）



- ◆<後援事業> ブロニスワフ・ピウスツキ
記念碑建立イベント

<記念碑除幕式>

日時：10月19日
場所：アイヌ民族博物館
（白老郡白老町）

<国際セミナー>

日時：10月20日
場所：北大学術交流会館
「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの
仕事 -白老における記念碑建立を期に-」

※ 只今準備中のため、変更の可能性があります。
ご了承ください。詳細は後日お知らせします。

新入会員のご紹介

7名の方々が新たに会員
になりました。どうぞ宜しく
お願いいたします。
（事務局）

青木 緑 さん
秋田正恵 さん
新井藤子 さん
藤野知明 さん
水上さえ さん
本谷英一 さん
山本弘子 さん
（五十音順）

<連載俳句>



ポーランド & ニッポン歳時記



聞魚ぬる真昼のBARの真中に

（聞魚三夏）

千代磨

蟻うごき農夫も動く日なかな

（蟻三夏）

風わたるゴツホをおもふ麦の秋

（麦の秋三夏）

<岩見沢市在住。霜田千代磨さん>

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

木婚式

ポーランドでは5年毎に結婚記念日を祝う習慣があります。ちょうど結婚五周年を迎える今年、日本の家族とお祝いをする予定を立てていましたが、ポーランドを発つ前にあちらの家族や友達も祝ってくれました。皆の前で結婚の誓いの言葉を改めて交わしました。その時には、まさか札幌の友達にも祝ってもらうことになるとは夢にも思いませんでした。自分の人生の小道を、驚きをもって見つめています。

mój nauczyciel
i moja uczennica
jemy soba na zimno

我が先生と教え子と
啜るざるそば



<ポズナン市在住。ポーランド人女性

津田モニカさん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

POLE

第79号 ポーレ編集委員会
<http://hokkaido-poland.com/>

氏間多伊子 栗原朋友子
佐光 伸一 ラファウ・ジェブカ

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 79 号 (2013 年 8 月)

目 次

〈第 67 回例会〉マリア・マグダレナ・カチオルオルガンリサイタル with 松井亜樹 [案内]、マ リア・マグダレナ・カチオル「日本の印象」、北海道大学パイプオルガン研究会会長金多景 (キム・ダギョン)「北大クラーク会館のパイプオルガンについて」…………… 1	1
〈第 65 回例会報告〉佐光伸一「ポーランド映画セレクションⅢ [2013.6.8-9] を終えて」、久 山宏一「ドルィガス監督との出会い」…………… 5	5
津田晃岐〈ポーランドだより 10〉「変わりゆくポーランドのタデウシュ・カントル」…………… 9	9
尾形芳秀〈第 66 回例会報告〉[第 3 回]「午後のポエジア」[2013.6.29]…………… 12	12
尾形芳秀「『脱出記』の記憶—シベリアの強制」…………… 14	14
ヤドヴィガ・ロドヴィチ「幽玄の情景 (1)」…………… 14	14
霜田千代磨「ポーランド空手道事始め」…………… 15	15
霜田千代磨・津田モニカ〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 / [事務局より] 今後の活動予定： マリア・マグダレナ・カチオルオルガンリサイタル with 松井亜樹、ヴィトルト・ルトスワ フスキ生誕 100 周年記念レクチャーコンサート、〈後援事業〉プロニスワフ・ピウスツ記念 碑建立イベント…………… 16	16